

# Five-Year Incidence of Myopic Maculopathy in a General Japanese Population The Hisayama Study

上田, 瑛美

<https://hdl.handle.net/2324/4475021>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	上田 瑛美
論文名	Five-Year Incidence of Myopic Maculopathy in a General Japanese Population The Hisayama Study
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場 英司 副査 九州大学 教授 鴨打 正浩 副査 九州大学 教授 須藤 信行

### 論文審査の結果の要旨

近視性黄斑症は世界全域の成人の失明および視覚障害の主要原因である。近年の世界中の近視人口の急増とともに、今後も近視性黄斑症の患者数が増加することが予想される。しかし、前向き追跡研究による近視性黄斑症の発症率かつ危険因子を検討した報告はみられない。世界有数の近視国であるわが国の地域住民を対象とした本疫学研究は世界全域に向けて有用なエビデンスを提供し得る。本研究ではわが国の地域一般住民において、近視性黄斑症の発症率とその危険因子を検討することを目的とした。本研究は日本の久山町での一般住民における前向きコホート研究である。2012年に久山町眼科健診を受診し、近視性黄斑症既発症者を除外した40歳以上の住民のうち、2017年に追跡健診を受診した2,164名を最終研究対象者とした。主要アウトカムは近視性黄斑症の発症であり、近視性黄斑症の程度は、Meta-analysis of pathologic myopia study group classification systemの基準に基づいて分類した。研究対象者の平均年齢は62.4歳（標準偏差10.9）、男性の割合は42.5%（920人）であった。2012年から2017年の追跡期間中に24人が近視性黄斑症を発症した。近視性黄斑症の5年累積発症率は全体で1.1%（95%信頼区間0.6-1.5）、男性で1.4%（95%信頼区間0.6-2.2）、女性で0.9%（95%信頼区間0.4-1.4）であった。ロジスティック回帰分析による多変量解析では加齢（多変量調整後オッズ比 1.06（95%信頼区間1.01-1.11））と眼軸長が長いこと（多変量調整後オッズ比 2.94（95%信頼区間2.19-3.95））が近視性黄斑症の発症と関連した。わが国の地域一般住民において、5年の追跡期間中に24人（1%）が近視性黄斑症を発症し、他のアジア圏の既知報告より高率であった。加齢と眼軸長が長いことがそれぞれ近視性黄斑症の発症に対する独立した危険因子であった。今後の世界各国での近視性黄斑症の発症率および危険因子の研究が待たれる。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが概ね適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。